博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

下重　清「幕閣譜代藩の政治構造」

本論文は、藩政史研究の半世紀にわたる動向を精査し、一藩完結・総合型の手法をとってきた個別藩研究のあり方を克服するために、藩社会を内外に関連づけるあり方を重視する近年の「藩世界」論を受けとめ、さらに、藩世界研究の全体の中で譜代藩研究が進展していないという研究史認識に立って、譜代大名小田原藩の研究を進めたものである。従来の譜代藩研究は、外様諸藩研究と同質の藩政史料を用いて研究し、藩政展開が同じ方向にあることを実証してきた。これに対して、論者は、幕府老中として全国政治に参与する藩を幕閣譜代藩とし、その政治参加や軍役負担などが、大名側から考察することで、藩政は一律的でなく多様さや独自性があることを論証していく。同時に、蓄積のある公儀権力についての研究史の動向、課題に、幕閣参加の譜代藩政を結びつけて理解することによって、「幕藩制国家」の特質を解明することを目ざそうとする。

そうした研究目標を立てて成果を期待できる個別藩として、論者は、17 世紀の幕閣譜代大名稲葉氏治世の小田原藩を取り上げ、全国政治と領内政治の関係を検討し、譜代大名が幕藩制国家を運営する政治構造を解明しようとする。そして、17 世紀前半のいわゆる「寛永政治」は、従来言われるように将軍親裁政治ではなく、家門・譜代大名の集団的指導体制としての「老中政治」であったとするなど、将軍・門閥譜代大名・幕閣譜代大名の三者の権力関係の丁寧な考察によって、研究史をこえるいくつかの論点を提示している。

本論文の概略を述べると、第一章では、家光政権期における家光子飼いの年寄稲葉正勝の小田原入封の意義について考察する。論者は駿府藩徳川忠長（家光弟、駿河大納言）の常軌を逸した行動と大御所秀忠・将軍家光の二元政治下で、「関東御要害」体制という江戸防衛構想が展開し、関所・検閲制度が整備された。その到達点が、忠長の改易と、小田原要害化のための側近大名稲葉正勝の加増、小田原入封であり、稲葉氏によって行われた小田原城の修築、軍備の増強であったとする。

第二章では、秀忠・家光二元政治解消の過程で、幕閣譜代大名が領地を関東の外部へ移されることについて考察する。論者によれば、それは政権からの排除ではなく、幕府の軍制改革・機構整備のための全国的な再配置であるとする。またいわゆる「寛永政治」を将軍親裁政治とみるのではなく家門・譜代大名のいわば集団的指導体制としての「老中政治」であったことを論証し、こうした政治体制が公儀権力の権威の長期化を支えたとする。

第三章では、稲葉氏治世の小田原藩の軍役負担と藩財政を検討し、平時の軍役に譜代大名の特色が現れることを明らかにする。すなわち江戸城大門警衛番、将軍等要人警護番、箱根等関所番など常備軍と変わらぬ軍役であり、家臣団増強も要請され、これらが譜代藩の財政を圧迫したとする。

第四章では、稲葉正勝の急死によって 12 歳の若年で稲葉家家督を相続した稲葉正則が、

藩主・宗主・老中（35 歳）として、どのような人的関係の中におかれ、幕閣譜代藩の特色をどこで現わしているのかについて、時系列的に具体的な検討を加える。稲葉正則と細川家・斎藤家・堀田家・毛利家・酒井家・保科家・伊達家などとの武家人脈を詳細に検討し、将軍専制と幕閣譜代大名の集団指導体制の組み合わせが、公儀権力の基本スタイルであるとし、門閥譜代大名の執政が排される政治のあり方を論証している。

第五章では、家臣団の構造を、藩主と重臣・家中「役人」との関係から解き明かし、領民（惣代名主・町惣代年寄・個人）の江戸藩邸御年頭御目見儀礼から、領内身分の優先順位など、小田原藩の支配の変化を明らかにする。

第六章では、稲葉正則の、武家人脈以外の宗教者・学者・絵師・能役者・名工・茶人・商人などとの広い交流を検討し、それらの世界との交流が譜代大名としての力を支え、また譜代大名を媒介にして政策構想に示唆を与えるなどして、公儀政治へ流れ込んでいく回路を明らかにしている。論者は、そうした人的関係の全体が将軍専制と幕閣譜代大名集団指導体制の組合せを実現させ、門閥譜代大名の執政を排除する力になったとするとともに、家臣・領民との関係を検討し、譜代大名の権力基盤を明らかにしている。

本論文に残された課題をあげると、論者は「幕閣譜代藩」という範疇を立てて稲葉時代の小田原藩を検討したが、そこで得られた論点がはたして他の幕閣譜代藩を検討した場合にも適合するかどうかは、他の諸事例の検討を経なければ明らかにならない。また譜代藩は幕閣に加わるだけでなく、大坂守衛、長崎警護などさまざまな役務をその領地で負わされている。幕閣参加だけが、領内負担を増させるのではなく、他の課役もまた譜代大名の負担を引き上げ、領内へ転嫁される。こうした実態についても明らかにして、幕閣入りした譜代大名と比較して、譜代藩の特徴を総体として説明することが望まれる。

以上、本論文は、幕閣譜代藩という切口から丁寧な論証に基づいて、研究史を超える斬新な論点を提示しており、学界にとっても大きな成果である。よって本論文は、博士（文学、早稲田大学）の学位に相当するものと判断する。

2006 年 4 月 13 日

主任審査委員	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	深谷克己
	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	紙屋敦之
	専修大学教授		青木美智男